

日付	発駅/停留所	時刻	列車/バス便名	運賃/料金
2019/12/30(月)	中山道線 新宿 発	13:02	111E 新宿始発 特急あかべこ11号 会津若松	新宿～檜枝岐 普通運賃 6750円 特急料金(新宿～会津若松 1730円)は払い戻し
	奥武本線 白河着	15:11(遅れて15:31着)		
	白田線 白河発	16:15	911D 白河始発 普通 只見	
	白田線 南郷着	18:06(遅れて18:28着)	994D 只見始発 普通 檜枝岐	
	上岩線 南郷発	18:10(遅れて18:35発)		
	上岩線 檜枝岐着	18:59(遅れて19:24着)		
2019/12/31(火)	上岩線 檜枝岐発	7:53	982D 南郷始発 普通 沼田	檜枝岐～沼田 普通運賃 1420円
	上岩線 沼田着	9:48		

城下町の憂鬱

師走の新宿西口、明日はもう大晦日だというのに全く休む気配のない狭苦しい地下通路を抜けると、18の春に見た頃と変わらぬ真っ赤なおーびい像がそっと佇んでいる。真新しい自動改札機がずらりと並ぶ堂々たる奥武中央改札。真冬の昼下がりの儂げな陽気が半円形のドーム窓から差し込む吹き抜けの大ホールに7面のホームが白く浮かび、地上2階から伸びるエスカレーターやスケルトンのエレベーターは天上から垂れる蜘蛛の糸のよう。東京に出てきたばかりの頃、私が最も愛した場所。なのに今日は頭上から垂れる構造物も、エメラルドグリーンとアイボリーの急行列車が慌ただしく発着するホームも、そしてこの巨大なターミナルにほんのりと漂う北の空気そのものが、私の胸を素手で掴みに来るようだ。これまで実家に帰るとなれば旅の友として欠かせなかった「日光牛ステーキ弁当」にも手が伸びず、お茶だけを買って会津若松行きの特急あかべこ11号へ。窓際の座席に座るといつものように目の前のテーブルを倒す。お茶を置く窪みに貼られたステッカーから、「ここに飲み物を置いてね！」と書かれた吹き出し付きのおーびいがこちらをいたずらっぽく覗き込む。あかべこをまとったゆるキャラよ、頼むから今はその円らな目で見つめないで欲しい…。

「あなたにぴったりの方よ。」見合いを進めてきた母にきっと悪気はない。しかし私はまだ大学3年生だ。お相手は父の取引先の会社の息子だという。「その方もあなたも東京の大学の出ということになるし、良いのじゃないかしら。」LINEで送られてきた母のメッセージについてきた“V”の字のスタンプ。お相手は理科大出身の某大手メーカー勤めと聞いて、私は我が親の無知に体中から火が出る思いだった。同じ「東京の大学」と言ったって……！

特急あかべこ号はいつの間にか黒羽を出て、明るく乾ききったただっ広い関東平野を後に、東北へ抜ける峠に向かっていった。どうしたのだろう、私鉄の韋駄天とも呼ばれる奥武の特急列車が妙にスピードを落として走っている。かつて芭蕉が越えた道には粉雪が斜めに舞い、時折遠くに見える那須連峰は重くのしかかる雲の下薄墨色にかすんでいる。「お客様にお知らせいたします。」車内スピーカーから、潰れた車掌の声が流れてきた。「只今列車はおよそ20分の遅れをもちまして運転しております。次は白河に停車いたしますが、この先磐岩線内会津地区におきまして先程来大雪が発生しており列車が動けない状況となっております。当列車はこの先岩代長沼まで運転を予定しておりますが、会津若松方面ご利用のお客様は白河駅から代行輸送をご案内します。繰り返しお客様に…」いつも昼の1時過ぎに新宿を出るこの特急に乗れば横岡手前ですれ違うはずの上り普通列車が、単線の境ノ明神駅で足止めされている。すでにダイヤの乱れはこちら奥武本線内までも及んでいるのか。

特急が会津若松まで行かないなら仕方ない、奥武本線と磐岩線の境、白河駅に降り立つ。粉雪交じりの北風が吹き下ろす土手の上のホーム。風の来る方を見遣れば、私の故郷の城とはまた違う、白雪舞う中に黒い板塀が凜々しい小峰城。ああ、また、城だ…。私の故郷も城の町。そして、私の大切な人の故郷にも…そう、私には待つ人がいる。東京に出て小さな新設大学のささやかでもアットホームなゼミで知り合った1つ上の先輩。口数少なく、いつも澄んだ瞳でどこか遠くを見ているあの人。「僕の故郷ですか、日本海に面した小さな城下町ですよ。」日本海に面した小さな城下町、そのイメージをそのまま体現したような、物静かでも誇り高い、そして一見厳しい眼差しの中に誰よりも温かな心を持っている彼。彼にはとても「見合いに行く」などとは切り出せず、「正月は実家に」とだけ言い残してここまで来てしまった自分が恨めしい。「会津湊、会津若松駅までご利用のお客様は駅前にバスをご用意しております！乗り場はバス乗り場3番、バス乗り場3番で…」舞い散る雪に負



けじとスピーカーから流れるアナウンスも上の空、私の目は薄桃色のペンキが所々剥がれた木造洋館の駅舎の、かつてステッキにシャッポを身に着けたスリーピーススーツの田舎紳士が葉巻を手に汽車を待っていたかもしれない、そんな明治のハイカラの残り香が薄暗い中に沈殿したがるんとした改札広間に、パタパタと金属的で乾いた音を立てて回っている愛想のない発車案内表示機に吸いつけられていた。奥武本線、磐岩線の発車案内がくるくる回った挙句に「調整中」で停止する中、唯一時刻を示し私の気を留めたのが、「1番線 16時15分 普通 只見」の文字。白田線、か…。この列車で只見まで行けば、只見からJR線に乗り換えて会津若松へ回れるはず…鉄道に詳しくない私にも、地元会津若松で只見へ行く列車を見た記憶はうっすらあったのだ。只見行きの発車まではまだ40分以上あるが、その分、若松の実家に帰るのを後に延ばせる…そんな自分で見ても小賢しい打算が、喉の奥に魚の骨のようにつかえている焦りを少しでも和らげてくれるようだった。

木造駅舎の底冷えのする広間で過ごす間にすっかり空はねずみ色に、そしていつのまにこんなに降り積もったのだろう、先程まで漆黒の板塀を誇示していた小峰城も銀色に塗りこめられていた。16時15分、前面に氷の塊をつけた赤とクリームの2両編成のディーゼルカーは駅改札から最も近い切り欠きホームからエンジンの回転音だけは高らかに、でも加速は実にゆっくりと、東北の入り口に位置するこの小さな要衝駅を後にした。客室には私と、地元の高校生と思しき3、4人。東北新幹線の高架線をくぐってしまえば、次第に町の灯は遠のき、列車はしんと雪の降る単線の線路を行くのみ。窓から見れば夕暮れる中田か畑であろう平地にはコバルト色に浮かぶ布団がふかふかに敷き詰められ、時折列車が進む脇の木々から雪の塊が落ちるバサッという音にハッと我に返る。奥白河高原、という名に合わず崖の下の狭隘な土地に設けられた小さな駅を出ると、列車は阿武隈川を飛び越え長いトンネルへと潜り込んだ。トンネルはループを描いていたのだろうか、山の中腹に出てみると眼下遠く蒼く輝く地平には先ほどまで走っていた二条のレールが、Hの鉛筆で描いたような繊細な平行線を見せている。阿武隈川の溪流に沿って進むうち車窓はみるみる色を失い、気がつけば窓の外には伸ばした髪を毛先まで揃え、前髪もきれいに切りそろえてチークまで差しているのに目だけに光の消えた女が映っている。ああ、私だ。

長い、本当に長い峠のトンネルを越えると、列車は空を飛んでいるのだろうか？何十mも下にぽつぽつと見える民家の杏子色の灯が、真っ白に塗りこめられた盆地に狐か狸が蝋燭を灯したかのようだ。「ここは高いところを走るから、下に見える景色が遠いよねえ。」振り向くと途中から乗って来たのだろうか？中肉中背の白髪の男性が隣のボックスから笑みを浮かべている。「お嬢さん、会津田島までかい。」「いえ、とりあえず只見までと…」咄嗟に答えたが、只見に着くのは何時になるのだろうか。そこからの只見線は乗り継げるのだろうか。「ありゃ、只見に宿は取ってあるんで？」「いえ…」しばらく怪訝な顔で見ていた彼は、私の生気のない目に何かを察したのだろう、「この汽車只見着くのは夜7時過ぎよ、只見線も最終終わっている。営業するわけじゃないが、おじさん家檜枝岐って村で民宿やってんだ。もし泊まるとこもないんならよ、これからおっかあに電話しとくから、うち泊まったらどうだね。」私は地理というのが滅法苦手な自分を呪った。檜枝岐、という地名は昔中学で聞いたことがある。福島県内のどこかだ。でもそれがどこなのか全く分からない。そしてその地理音痴が、全ては今に至る悲劇を生んでいるように思うのだ。日本海に面した城下町、と聞いて勘を働かせていけば…いや、彼に非はないのだ。それに彼がどうした出自であれ、私は彼を愛している。



会津針生という駅で20分ほど待たされた。ホームの駅名標をオレンジ色の裸電球がぼんやりと照らしている。何でも大雪で先行列車が遅れているのだという。先行列車？白河を出てからここまで反対側の列車とは2回しかすれ違っていないが、こんな田舎にそんなに列車が走っているものだろうか。「これだけ降ってるからね、ラッセルが出ているんだね。」民宿のおじさんが楽しそうに言う。只見へ行く鉄路と檜枝岐へ行く鉄路が分かれる山間の駅、南郷に着くと、果たして隣のホームに全身ごっそり雪がこびりついた朱色の除雪車が停まり、駅員が群がって雪を落としているのが見えた。檜枝岐へ行く列車は、ここで乗り換えだ…。

どれだけ寝ただろう、目を覚ますと布団から顔だけを出した和室の空気はしんと冷え切っていた。畳敷きの民宿の、端が少し黄ばんで立て付けが悪くなった障子を開ければ、熱いくらいの白、白、白…雪に埋もれた里の風景の全てが朝陽の下ダイヤモンドをばらまいた様に煌めいている。伸ばした髪をゴムで結び留め、宿代を払っておじさんとおばさんに礼を言い、道を聞いたとおりに駅に向かう。村一番の通りはまだまだ雪に埋もれ、一件、また一件と通りを挟む旅館や民家からスコップを持った人が出てきては雪をかき、あるいはホースでお湯をまいている。村の外れの山際にある駅は黒ずんだ木造の古い建物だが、駅の改札を入ろうとして私の目は発車案内に釘付けになった。会津若松に向かうべくこれから乗ろうという南郷行きの下り列車と並んで、普通沼田行きとある。「戸倉尾瀬口、片品方面」ですって！？昨年初夏に彼と歩いた尾瀬を埋め尽くしていたミスバショウが目に見えなかった。至仏山を望む木道で、彼が何度も足を踏み外しそうになっておどけていた、そのいつもの物静かな様からは想像のできない少年のような笑顔も。慌てて駅舎に大きく掲げられた地図を見ると、ここ檜枝岐は福島県の南の端、峠を越えれば群馬の尾瀬、沼田なのだ。決めた！小さなプラットフォームに上がると、私は目の前に停まる南郷行きの列車を見上げ思い切り睨みつけてみた。これじゃない、私の乗る列車は、これじゃない！そう言い聞かせると、構内踏切を反対側へ、帰るのだ、空っ風の吹く関東へ、彼の待つ東京へ。そして親には臆せず、隠さずはっきりと言おう。私が好きなのは、萩という西の町の出身の、あの静かな彼女なのだ。



奥武鉄道

ウェブサイト：<https://www.obu-railway.com/>

Twitter：[@oburailway](https://twitter.com/oburailway)

